

雨月物語典拠新考

— 中世の作品三種について —

後 藤 丹 治

(1) 雨月物語の典拠となつた中世の作品として、最初に提示すべきは、鴨長明の方丈記である。この方丈記が雨月物語の出所となつたことについては、従来の研究家は全然気が付いてはゐない。しかし「浅茅が宿」には明かにさうと思はれる点がある。

「浅茅が宿」に勝四郎が故郷を離れて後、東国地方に戦乱が起り、流行病さへも行はれて、そのため勝四郎は帰国出来ず、宮木も寂しく死去すると云ふ。その辺の事情を記して「浅茅が宿」に「一人の婢女も去て、すこしの貯へもむなしく、其年も暮ぬ。年あらたまりぬれども猶をさまざま。あまさへ去年の秋京家の下知として、美濃の国群上の主、東の下野守常縁に御旗を給びて、云々」とある。これは宮木が夫の不在中、家を守るといふ個所であるが、更に

畿内にはまたもや畠山義就、政長兄弟の確執があつたといふことを記して「浅茅が宿」には「京ちかくも騒がしきに、春の頃より瘟疫さかに行はれて、屍は衢に疊、人の心も今や一劫の尽るならんと、はかなきかぎり悲しみける」と云つてゐる。

右の「浅茅が宿」の二つの個所を、私は方丈記の養和の飢饉の条から採つたものと思つてゐる。方丈記に「前の年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は立ちなほるべきかと思ふ程に、あまさへ疫病うちそひて、勝るやうに跡方なし。世の人みな飢死にければ、目を経つゝ窮まりゆくさま、少水の魚のたとへに似たり。……築土のつら、路のほとりに飢死ぬるたぐひは数も知らず。とり捨つるわざも無ければ、臭き香世界にみち／＼て、変り行く形ありさま、目もあてられぬ事おほかり。況むや川原などには、馬

車の行きちがふ道だにもなし」と見えてゐる。前年はこのやうな悲惨な状態で暮れた。明年は立ち直るかと思つたが、さうではなく、剩へ疫病が流行して、一層甚しくなつた。

そして餓死者が道路に充満して直視出来ない程であつたと、かういふ類似の事柄が方丈記にも現はれてゐて、それは全く「浅茅が宿」その儘であるといつてよい。用語や句法の上から眺めても、彼れに「其年も暮ぬ。年あらたまりぬれども猶をさまざま、あまさへ」とあれば、此れにも「前の年かくの如く、辛くして暮れぬ。明くる年は、立ちなほるべきかと思ふ程にあまさへ」とある。また彼れに「瘟疫さかに行はれて」とあれば、此れには「疫病うちそひて云々」とある。「あまつさへ」と云ふべき所を「あまさへ」と称し、「あまさへ」といふ語は「白峯」にもある。「流行病」のことを「えやみ」と呼んでゐる。かういふ特殊的な語句の一致する点から見ても、両文の間に直接交渉のあることは明白である。

一体、「浅茅が宿」の主要典拠たる「愛卿伝」や伽婢子には戦乱の記事はあるが、瘟疫が流行して、人間の死骸が街衢に満ちるといふやうな趣向は少しもない。「浅茅が宿」で戦乱に加ふるに瘟疫のことを以てしたのは、この場合頗る効果的であるが、それといふのも全く方丈記に導かれた、秋成の新案であつたのである。

(2)

方丈記と同じ随筆文学として、第二に挙ぐべきものに、徒然草がある。既に世間妾形氣(卷一第一話、卷四第三話)にも徒然草の本文を引いたところや「つれ／＼の鉄槌抄」の書名をあげたところがあり、徒然草対秋成の關係は十分に予想されるのであるが、しかしこの徒然草のことについては、これ迄余り問題とされてはゐない。僅かに樋口氏の評釈雨月物語(評釈江戸文学叢書読本傑作集所収)で、「白峯」にある「椎柴」といふ語に対し、徒然草の第三百三十七段(「椎柴、しらかしなどの、ぬれたるやうなる葉の上」にとある)をあげ、「吉備津の釜」の「招魂の法」に対して、徒然草第二百十段(「ある真言書の中に、喚子鳥鳴く時、招魂の法を行ふ次第あり」とある)をあげ、「貧福論」に「己がこのむまに／＼世を山林にのがれて、しづかに一生を終る。心のうちいかばかり清しからんとはうらやみぬるぞ」といふのに関して、徒然草の第十七段(「山寺にかきこもりて、仏につかうまつるこそ、つれ／＼もなく心の濁もきよまる心地すれ」とある)をあげてゐるのである。また藤村作博士著の新選近代文学の雨月物語では、「貧福論」の「いはざるは腹みつれば」に対して、その註解として徒然草の「おぼしき事はぬは、腹ふくるゝわざ」といふ一句をあげ、昭和十五年十二月、明治書院発行の金子元

臣氏編、雨月物語新抄では、「貧福論」に「富める者はかならず慳し、富めるものはおほく愚なり」といふ所や、同じ「貧福論」に「心のうちいかばかり清しからん」といふ所に対して、「徒然草に見ゆ」と頭註を施してあるのが目に着く位である。

かういふ次第で、樋口、藤村、金子三氏の著書の中には、多少この徒然草のことに注意を払つてはゐるが、それも詞句上の註釈として引かれた程度に過ぎないのであつて、雨月物語創作上の原拠と云ふ明白な意識はなかつたやうである。(金子氏が「富め者は云々」を徒然草に見るとしたのは誤謬で、これは五雜俎に拠つたのである。五雜俎のことは、「歴史日本」第一巻第六号所載拙稿参照)しかし私は、雨月物語の典拠として、もつと大きな意義をこの隨筆の上に見出すのである。

徒然草の第十八段に、人間は廉直でなければならぬといふ議論がある。その文をあげると、

人は己れをつまやかにし、奢を退けて、財をもたず、世を貪らざらむぞいみじかるべき。昔より賢き人の富めるは稀なり。もろこしに許由といひつる人は、更に身に從へる貯へもなく、水をも手して捧げて飲みけるを見て、瓢といふ物を人の得させたりければ、ある時木の枝に掛けたりければ、風吹かれて鳴りけるを、かしがま

しかるらん」とあり、鈴木氏の新註雨月物語評釈では、これを前記「貧福論」の詞句の出所としてゐるやうであるが、前後の関係上、徒然草に拠るものとした方が穩かである)

(3)

次に確定的な証左がないので、断言は出来ないが、さうでないかと疑はれるものに、徒然草の第二百十七段の或る大福長者の致富論がある。すなはち初めに人は富裕でなければならぬことを説き、富裕を得るが為の手段として、人間常住の思ひに住して、仮りにも無常を觀じないこと、何事にも必要を満たしてはならぬこと、金錢の尊ぶべきこと、怒り怨んでならぬこと、正直にして約束を堅く守ること等を数へ、最後に右の大福長者の意見に対して、兼好の批判を記してゐる。この一文は徒然草中の議論文として注目されるのであるが、それを「貧福論」と較べると、茲にもやはり共通性のあることが推定される。徒然草に「人は万をさしおきて、ひたぶるに徳を付くべきなり。貧しくは生けるかひなし。富めるのみを人とす」と云つてゐるが、かういふ思想は「貧福論」全体に漲つて、敢て珍らしいことではない。更に徒然草では「錢を奴の如くして用ふる物と知らば、永く貧苦を免るべからず。君のごとく神のごとく畏れ尊みて、從へ用ふる事なかれ」といつてゐる。これは金錢の濫用を戒め、主君の如く神の如く敬せよと論述して

しとて捨てつ。又手に拵びてぞ水も飲みける。いかばかり心のうち涼しかりけむ。

とある。この一節を読んで、直ちに私の胸に浮ぶのは、「貧福論」の記載である。黄金の精靈は岡左内に向ひ、身の行も正しく誠の心のある人で、しかも窮迫するものがあるのは、天蒼氏の賜が少く生れ出たのであるから、たとひ精神を勞しても富貴を得ることは困難であると論じ、「さればこそいにしへの賢き人は、もともと益あればもともめ、益なくばもともめず。己がこのむまに、世を山林にのがれて、しづかに一生を終る。心のうちいかばかり清しからんとはうらやみぬるぞ」と続けてゐる。一は清廉潔白な高士の徳を頌し、他は賢人の無欲を讚歎する。両書共にその議論が似てゐる上に、徒然草に「昔より賢き人の云々」とあれば、「貧福論」には「いにしへの賢き人は云々」と書いてある。また徒然草に「いかばかり心のうち涼しかりけむ」と見え、これに照応して「貧福論」には「心のうちいかばかり清しからん」とはうらやみぬるぞ」と述べてゐる。かう見て来ると、「貧福論」のこの個所は、徒然草第十八段の文面を基礎にして書いてゐるのであり、秋成が「いにしへの賢き人」と云つてゐるのも、結局許由のやうな隱者高士を指してゐると見るべきである。(拾遺集または前大納言公任卿集に「さゝ浪や志賀の浦風いかばかり心のうちや涼

ゐるのであるが、「貧福論」に「卑吝貪酷の人は、金銀を見て、父母のごとく親しみ、食ふべきをも喫はず、穿べき物を著ず。得がたきいのちさへ惜しとおもはで、起ておもひ臥てわすれねば、こゝにあつまる事まのあたりなることわりなり」とあるのと併せ考へる必要がある。殊に「君のごとく神のごとく畏れ尊みて」(徒然草)と「父母のごとく親しみ」(貧福論)と、この詞句上の類似は看逃すことが出来ないと思ふ。茲にも何かの繋がりがあるのではないかとと思ふ。

更に徒然草の第七十四段を見ると、それには當々として利に趨り、慾を貪る人間の生活を叙して「蟻のごとくに集まりて、東西にいそぎ南北にはしる。高きあり、賤しきあり。老いたるあり、若きあり。行く処あり、帰る家あり。夕にいねて朝に起く。いとむ所何事ぞや。生をむさぼり、利をもとめてやむ時なし」とある。この個所は「貧福論」に現はれた、勤勉でありながら薄命な人物の記述に思ひ合はすものがある。さらばその人は作業にうときゆゑかと思れば、夙に起おそふして、性力を凝し、西にひかして走りまどふ蹠踏さらに閑なく」といふのがすなはちそれである。尤も「貧福論」のこの辺の個所が剪燈新話の「富貴発跡司志」に基づいてゐることは嘗て論述した如くであるが「国語国文」第二十二卷第七号所載拙稿参照、剪燈新話

のみでは、かういふ文は生れて来ない。「夙に起おそふふして」とか「西に東に走りまどふ蹠躑あひさま」とか見えてゐるのは、全く徒然草と酷似してゐる。剪燈新話を主とし、徒然草を副として、秋成はこの辺の記事を書いたのであらう。

(4)

最後に古今著聞集と雨月物語との交渉に移る。

この問題については、是迄の研究者によつて、多少とも注意されてはゐる。すなはち鈴木氏の雨月物語新釈では「夢窓の鯉魚」の末段に三井寺の僧興義の弟子成光の画才のこゝとを記して「其弟子成光なるもの、興義が神妙をつたへて時に名あり。閑院の殿の障子に鶏を画しに、生ける鶏この絵を見て蹴けるよしを、古き物がたりに載たり」とあるのをあげ、この「古き物語」を古今著聞集であると註し、爾後の諸註釈書もまたこれに従つてゐる。(この説は鈴木氏の新註雨月物語評釈にもある)これは古今著聞集卷十一、画図の条に「成光閑院の障子に鶏を書きたりけるを、実の鶏見て蹴けるとなん。この成光は三井寺の僧興義が弟子になん侍りける」と見えてゐるのがその原文であるが、文章の比較上、鈴木氏の所説は正しいものと考へられる。秋成は後年のものながら春雨物語の「天津処女」でも古今著聞集を採つてゐるが、こゝでもこの書に依拠したのである。(新潮社発行日本文学大辞典で、この興義の話をや治拾遺

の一条としてゐるのは誤謬である。なほ春雨物語と著聞集との關係については、中村幸彦氏の見解が「国語国文」第二十一巻第十号に載つてゐる)

さて右の如く「夢窓の鯉魚」に所謂「古き物語」が古今著聞集であることは旧説の通りであるが、さう見る時、更に新に指摘する必要のあるのは、古今著聞集第十一蹴鞠の条である。

古今著聞集の卷十一、蹴鞠の条には、侍従大納言成通が鞠の精に会ふ記事がある。この古今著聞集の記事は成通卿口伝日記(群書類従蹴鞠部所収)を殆どそのまま転載してゐるのであつて、それは侍従大納言成通が鞠を好み、これを祭り、人々を会して、饗を設けて勸盃し、且つ祿を賜はつた。当夜成通はその事を記さうとして、燈台を近く寄せ、墨をすつてゐる時、棚に置いた鞠が前に落ちて来た。怪んで見ると、顔は人、手足や身は猿で、三四歳の小児位のものが、三人現はれた。何者かと尋ねると、鞠の精だと云ふ。そして鞠のことに關して成通と問答をなし、形を消したといふのである。

これを読んで私は直ちに例の「貧福論」のことを聯想する。「貧福論」の黄金の精靈が伽婢子の錢の精靈の再来であることは普通に云はれてゐる所であり、またそれが今昔物語集の水の精の系統を曳くことも明白であるが(今昔に如きは、著聞集、「貧福論」、両文の關係を暗示するものとして、注意すべきであると思ふ。

これを文辞の上から眺めても、古今著聞集には「何者ぞとあらくとへば、御鞠の精なりと答ふ。昔よりはほどに御鞠このませ給ふ人、いまだおはしませず。千日のはて、さま／＼の物賜りて、悦申さんと思ひ、又身のありさま、御鞠の事をも、能く／＼申さんれうに参りたり」とあり、これに對して「貧福論」では「こゝに來るは誰……翁いふ、かく参りたるは魘魅にあらざ人にあらざ。君がかしづき給ふ黄金の精靈なり。年來篤くもてなし給ふうれしさに、夜語せんとて推てまいりたるなり」とあつて、相互に似た趣のあることは拒まれない。(成通が鞠の精に会ふ話は撰集抄、十訓抄、遊庭秘抄等にも同話があるが、類似性の多寡といふ点から眺めて、直接原拠はやはり古今著聞集であつたと見るべきである)

上述のやうな理由で、「貧福論」の一原拠として、私は改めて著聞集の成通の故事を推したいと思ふ。

(昭和廿四年五月稿、廿九年五月補)

ついでには近く「国文学論叢」第五輯に私見を掲載する予定である)、伽婢子や今昔物語集のみでは、「貧福論」の岡内が黄金を大切に、したために、その精靈が出現したといふ、黄金の精靈出現の動機が説明し尽くされない。伽婢子では、錢の精靈が長柄の僧都の許に現はれて来たので、それを便りに古錢を發掘したとあつて、原因結果の關係が「貧福論」とは逆になつてゐる。今昔物語集でも水の精の出現は偶然の出来事であるに過ぎず、「貧福論」に於けるが如く、主人公と精靈との間に有機的な結びつきがある訳ではない。然るに古今著聞集では、侍従大納言成通が鞠を好み、これを大切にしたので、その鞠の精が悦び申しのため姿を現はしたといふのであつて、因果關係の状態が、他の何れの典拠よりも一層「貧福論」に近似してゐる。また「貧福論」の主人公左内は家に久しく仕へてゐる男に黄金を与へてこれを賞した夜、精靈が現はれるのであり、古今著聞集の成通も鞠を祭り、饗宴勸盃した当夜、精靈が出現するのである。しかもその出現の場面に於て(1)共に燈台の光を背景にしてゐること、(2)小さい人間の形で精靈が現はれること、(3)主客の間に問答が行はれること、(4)最後に精靈が姿を消すこと等、彼此の間には符節を合するが如きものが多いのである。この中で(2)(3)(4)は伽婢子や今昔物語集に先例があつて、必ずしも古今著聞集を待つ要はないが、(1)の部分の